

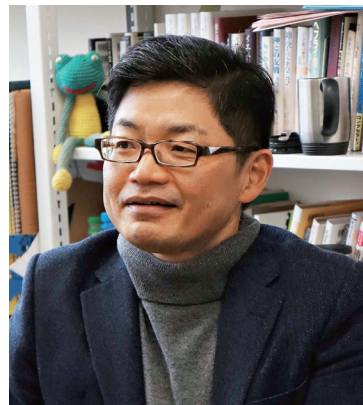
オルガニストを変えなさい

～自分を見失う前にやるべきことがある～

■自分を壊してしまおうとする人々に届けたい

親しい人や先輩後輩が自殺で亡くなるというような経験をするなかで、自殺予防の活動にかかわってきました。自分自身も、若いころ生きづらさを感じており、苦しむことがありました。自分中心という生き方がつらかったのですね。本当に自分をつくって自分を導いてくれる方を、聖書を通して示してもらって、初めて肩の力が抜けました。そして、自分を傷つけることをしなくなりました。

そんなとき、スイスの精神科医、ポール・トゥルニエ(1898～1986)の「暴力と人間」(ヨルダン社)という書籍に出会いました。そのなかには、「私は人間というすばらしい機械を、音栓、音管、回旋などをすべて備えた大きなオルガンのように見なしている。それを弾く人によって、めちゃくちゃな音も出てくれば、美しい神的音楽も弾き出せる。美しい音楽を弾き出すには、何もオルガンを駄目にする必要はないし、その構造を変える必要もない。それどころか、そのすべての可能性をフルに活かすことこそ大切なのではなかろうか。」という言葉が書かれてありました。それを読んで、自分を壊してしまおうとする方々にどうにかしてこのメッセージを伝えたいと思い始めました。



塩谷直也
(青山学院大学法学部教授・大学宗教主任)

■絶対的な親の存在も変えられる



これまでも、聖書のメッセージを稚拙ながら漫画や人形劇などで伝えてきましたが、この物語では主人公がオルガンだったため、漫画にするにも人形劇にするにも難しかったのです。それで自分でオリジナルの物語を作って話し始めました。そうしたら、思いのほか子どもたちから反応があったんですね。それならと、もっと広く伝えるために絵本の形で出したいと思うようになりました。

キリスト教の書物というのは、宗教とか哲学という分類で書店の隅に置かれてしまいがちです。そして、一旦そこに置かれると一般の人々の目には触れません。一般書、児童書、自己啓発書のコーナーに置かれるようなものを作りたい、と考えました。本文は、クリスチャンでなくても理解が及ぶような言葉を選び表現に努めました。もちろん、このような内容であっても、クリスチャンの受けとめ方とそうでない人の受けとめ方は違います。クリスチャンには、オルガニストが神であるとダイレクトに分かる暗示があります。そうでない人は分からないかもしれませんが、私はそれでもよいと思っているのです。

本書には、「親の操り人形」という言葉が出てきます。“親を変える”となると、これも一般の人たちには理解しがたいかもしれませんが、けれど、中学生くらいから親との関係に苦しむ子どもたちはたくさんいます。虐待を受けているような子どももいます。実は、そんな関係のなかでも親は変えられるよ、自分自身の絶対的存在だったものが本当はそうではないんだよ、ということが伝わればいいなと思っています。そういう子どもたちには、何とかこの本にたどりついていただきたい。自分を傷つけるまえに何かすることがある、というメッセージを受け取っていただきたいと願っています。